

オピニオン

■ボートは学校のスポーツ

東京五輪（1964年）やモントリオール五輪（1976年）でボート・日本代表チームのコーチを務めた荒川鐵太郎（1931年）、旧制一高（東京）によれば、一高（東京）におけるボート競技は「学校のスポーツ」であったという。

それは前身の東大予備門時代に始まり、一高から、後身の東大教養学部に至る「現在」まで続いているといっている。

一高では、文科、理科にそれぞれ端艇（ボート）部があり、最盛期の文科・理科の「対科レース」は、チャン（1軍）、セコ（2軍）、サード（3軍）のレースまであった。さらには、クラス対抗の「組選レース」、

の三高（京都）戦、インターハイ、インターカレッジなどがあった。三高戦や校内の対科レースは名前や形を変えながら現在も続けられている。

ボート競技が盛んだったのは一高だけではない。多くの旧制高校や大学生の間でボートは長らく人気スポーツだった。寮歌第1号とされる一高の初代寮委員長、赤沼金三郎作詞の端艇部歌『花は桜木』（明治23年）に始まり、部歌、応援歌も他のスポーツに比べて多い。

一高の端艇部応援歌『嗚呼向陵に正気あり』（大正9年）や二高（仙台）の対一高端艇競漕凱歌『鷗や春の』（同11年）。三高のボート選手・小口太郎（1897～1924年、三高東大）が作詞した『琵琶湖周

航の歌』（同8年）は後に、歌手の加藤登紀子らが歌い、広く知られるようになった。一高の『春は春は』（明治43年）は今もボート選手共通の愛唱歌として親しまれている。

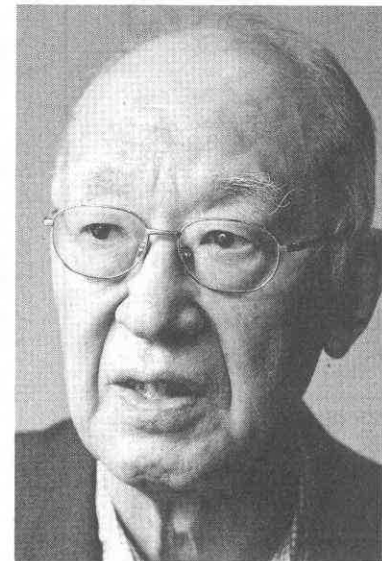
なぜ、これほどまでにボートが旧制高校生らのハートをとらえたのだろうか？

荒川はこう思う。「究極のチームスポーツだと思うんですよ。毎日毎日、つらい練習を重ね、ときにはケンカもしながら8人の漕手のタイミングが合い、だんだんとチームが出来上がってゆく。勝利をつかんでも（クルー中の）ひとりの英雄にスポットライトが当たることもない。これが「ボートの良さ」じゃないのかな」

旧制高校 寮歌物語

五輪に出場した東大クルー 1936年のベルリン五輪には、旧制一高出身者を中心とする「東京帝国大学淡青会」が日本代表エイトクルーとして出場。このクルーは同年イギリスで行われた伝統の「マロー・レガッタ」に出場し、見事優勝。「門外不出」の大賞盃を日本に持ち帰った。1960年のローマ五輪では、現・積水化学工業会長の久保尚武ら東大のフォアクルーが出場した。東大クルーの五輪出場はこの2回で、いずれも入賞はならなかった。

50歳で逃したオリンピック

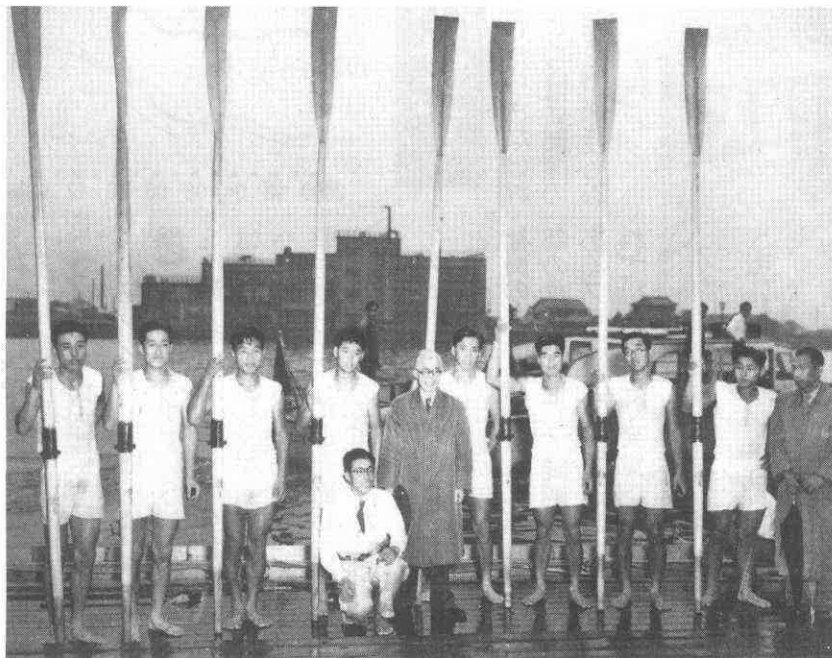


半藤一利氏（はんどう・かずとし）昭和5（1930）年東京生まれ。旧制浦和高校から東大文学部卒、文芸春秋入社。「週刊文春」「文芸春秋」編集長、取締役などを経て作家に。著書に「ノモンハンの夏」「日本のいちばん長い日」など。

■たった1度の敗戦に泣く

さて、荒川は一高から東大に進み、旧制浦和高校からきた半藤一利（現作家）と出会う。昭和24（1949）年、学制が変わり新制大学になったときだ。

当時の東大のボートはケタはずれに強かった。全日本選手権のエイト（8人の漕手＋舵手）で荒川、半藤が在籍した4年間のうち3度優勝（昭和24、25、27年）している。だが2人にとって、たった1度だけ優勝を逃した26年の全日本選手権のことが悔しくて忘れられない。その



ヘルシンキ五輪を目指した東大クルー（右から3人目が半藤氏、左端が荒川氏、昭和26年、荒川鐵太郎氏提供）

「敗戦国・日本」は出場できなかつた。ようやく、いくつかの種目に限って日本の復帰が認められたのがヘルシンキ五輪だったのである。

半藤がいう。「今の人たちにボクらの気持ちは分からないでしょうね。戦争に負けロンドンには出られなかったから、よけいに思いは募る。どうしてもオリンピックに出たいと思ったし、それだけ当時の東大は強かった。正直、負けるとは思っていませんでしたから」

運命のレースは26年9月9日、埼玉・戸田の2000メートルで行われた。決勝に進んだのは東大、慶大、一橋大の3校。レースの様子が当時のニュース映画に残っている。

中盤まで「本命の」東大がリード。1000メートルでスパートをかけ、リードを保ったまま、ややピッチを落とした頃合いを見計らったように、慶大が信じられないようなハイピッチで猛スパートをかけてきた。半藤は「（慶大は）まあ玉砕戦法に出たんですな。（船先に近い場所の漕手だった）ボクにはよく見えたけど、ゴールの差は50秒もなかった。もっとも、慶大の言い分じゃ、『1・5は離れていた』っていうけどね（苦笑）」と悔しさを隠さない。

荒川によれば、敗因のひとつは夏場のオーバークラッシュという。「暑い夏でした。そんなとき、コーチだったベルリン五輪に出場した先輩が秋田へ転勤になってしまい、練習はボクらに任せられたんです。『絶対にヘルシンキに行く』と意気込んでいたから猛烈に練習をやる。それで、本番ではへばってしまつたのでしょね」

ニュース映画を見れば、コース脇にはメディアをはじめ、観客が鈴なり、うら若き女学生の姿も目立つ。映像は抱き合つて喜びをほじけさせる慶大クルーを映し出すが、もちろん敗者・東大の姿はない。半藤が著した『隅田川の向こう側』（創元社）に短くこうあった。

《（コーチ）「どうした、よく漕げたか」。誰も黙って

たが、やがて、トীগン（クルーのひとりの愛称）が答えた。「慶大はよく、実によく頑張りました」「そうか」と善照さん（コーチ）はしばらくクルーを一人ひとり見つめたが、やがて「さあ、早く艇をあげる。閉会式があるから」。その瞬間、実にその瞬間だった。クルーの多くは涙を流した。とめようとしてもとまらない」

■体罰やシゴキは一切ナシ

ボート競技における東大の強みは「理論」だった。艇の建造やオール（櫂）の形・長さ、漕ぎ方にいたるまで、クルーはもちろん、OBや教授らを動員して徹底的に「理詰め」でやる。

荒川は「中学、高校、大学を通じてそうでしたが、コーチやOBから『精神論』を聞いたことがない。どうやったら艇が速く進めるか、効率的にオールで水をかく力を伝えられるか、とことん理論で考えました。もちろん猛練習はするが、鉄拳制裁やいじめなんてことは一切なかったですね」と振り返る。体力や筋力がモノをいう一方で、当時のクルーらは「アタマが悪いヤツにはできないスポーツ」と嘯いていたという。

大学卒業後、荒川は大学院へ進み、半藤は出版社に入った。2人ともボートとは関わり続けたが、選手としてオリンピックに出場する機会は二度とやっとなかった。

当時のクルーは全員健在だ。今も毎年会う。半藤に改めてボートの魅力を問うと、こんな答えが返ってきた。「仲間かな。あんな苦しい練習は、ひとりじゃ耐えられない。みんなで分かち合ったほうがいいでしょ」

——文中敬称略（文化部編集委員 喜多由浩）